

第十章 兵庫地方の塔

第 75 番 岩嶺山石峯寺三重塔—高野山真言宗—

兵庫県神戸市北区淡河町神影

わが国三重塔のなかで最も大きい塔のひとつを有し、昔は山陽路の要となっていた裏六甲にある石峯寺を、訪ねてみました。神戸電鉄の五社駅から、三木行きのバスに乗り、野瀬で下車し、北へ歩くこと 20 分ほどで、門前に着きます。

寺伝では、孝徳天皇の勅願寺として法道仙人が開き、行基が薬師堂を建立したとされています。空海が訪れて三重塔を建立し、鎌倉時代に隆盛し、その後は、戦火にみまわれ、衰えていきました。現存する三重塔は、一辺 5.11m・総高さ 24.41m と、純和様が保たれた大型の塔ですが、建立年代を特定する資料は、出てきていません。基壇の上に勾欄のない縁をめぐらして立ち、

中央間は板唐戸、脇間は連子窓で構成し、組物は三手先、軒は二軒繁垂木を用いています。初層を大きく高くし二・三層を低く小さく造ることで、十分な安定感を持たせています。相輪も大きさが上に行くに従って、小さくしてあり、高く見せる工夫がしてあります。



第 76 番 六条八幡神社三重塔

兵庫県神戸市北区山田町中村

裏六甲の六条八幡神社に、安置仏を取り払って、明治の廃仏毀釈を逃れ、神社境内に往時の名残を留めている三重塔があると知り、早速訪れてきました。神戸電鉄・箕谷駅からバスに乗り、山田小学校前で降り、歩くこと 10 分で境内に着きます。

歴史は、周防国の僧・基灯が一寺を建てたのが始まりで、平安時代に六条半官・源為義が攝津の守となった時、社殿を再建し、神宮寺を建て、岩清水八幡宮の分霊・六条左女牛八幡を勧請して神仏混淆の霊山として六条八幡神社を建立、その後足利家代々の尊信を受けました。

本殿から離れた木立を背にして建つ三重塔は、大工棟梁・藤原周次の作で、文正元年（1466）の建立で、屋根の両軒端の反りを強めた長刀反りを用いている和様の古典的美しさを見せている塔です。正面に石段を設けた自然石の二重基壇の上に勾欄のない縁をめぐるして立ち、中央間は板唐戸、脇間は連子窓で、組物は三手先、軒は二軒繁垂木の平行垂木を用いています。一辺 3.8m・総高さ 19.1m の檜皮葺きで、室町中期の特色を余すところなく示している、安定感のある美しい塔です。



第 77 番 比金山如意寺三重塔—天台宗—

兵庫県神戸市西区櫛谷町谷口

近世以降庇護者もまったく無く衰え、この地を神戸市に編入するときの調査で、ようやく存在が知られて重文に指定され、修復により面目を一新したという如意寺を、訪れました。明石駅からバスに乗り、谷口で下車し、山道を東に 15 分ほど歩くと、仁王門に出会います。門をくぐるとすぐに文殊堂があり、さらに奥に向かって進むと、右手に三重塔、左手に阿弥陀堂があります。

寺伝によりますと、法道上人が開基と伝えられ、大化改新で即位した孝徳天皇が勅願所と定め、七堂伽藍を建立し、鎮護国家の道場としました。その後、慈覚大師・円仁により、さらに安養尼願西により再興されたといわれています。

境内の東隅、文殊堂からは右手の一段高い台地に建つ三重塔は、全伽藍を見下ろす高台にそびえ美しい姿を、遠くから仰ぎ見ることができます。軒の出が深く、軽快に反りを打つ軒端、長い相輪とバランスの整った塔で、南北朝時代の和様塔婆の名作といえよう。建立は、至徳二年（1385）で、一辺 3.8m・総高さ 21.33m、本瓦葺きの品のある塔であります。



第 78 番 名草神社三重塔

兵庫県養父郡八鹿町石原

出雲大社本殿の改築用の杉材を妙見山から切り出し、寄進した見返りに、出雲から名草神社に移築された三重塔を、参拝するため八鹿町を訪れました。

名草神社は、江戸時代まで日光院と神仏習合の妙見宮として一体ものでした。さらに関西・中国地方の妙見社の総本家として、熊本の八代妙見、福島の相馬妙見とともに、日本三大妙見の一つに数えられてきました。名草神社は、八鹿駅から車で、八鹿の町並みを通り、小佐川に沿って妙見山の麓へ行き、そこから木立に囲まれた急で曲がりくねった細い坂道を、10km 近く登った妙見山の中腹の山中にあります。普段訪れる人は、ほとんどないようです。

交通不便な奥深い山中にある社は、静寂そのものであり、社殿の下の境内にある朱に輝く三重塔も、時の流れを忘れたかのように、建っています。塔は、大永九年（1527）出雲大社に尼子経久が寄進したものを、寛文三年（1663）出雲から当地へ移築されたもので、樹齢 1500 年の夫婦杉の横に建っています。一辺 4.7m・総高さ 22.3m、屋根は柿葺きの塔で、尾垂木上の隅垂木の先を支える束の彫刻がとてもユニークで、初層は邪鬼で、三層は猿が彫られています。



第 79 番 大円山徳光院多宝塔—臨濟宗天龍寺派—

兵庫県神戸市中央区葺合町

川崎造船所の創立者・川崎正蔵が菩提寺として建立した寺に、明王寺にあった多宝塔が移築されていることを知り、出向いてみました。徳光院は、新神戸駅を北に抜け、「滝山城跡」の道標の前を通り、砂子橋を渡って右側の山道をしばらく登って、下り坂を下ったところにあります。この付近にあった瀧勝寺の境内に、1905年川崎氏が、徳光院を建立しました。

多宝塔は、もと垂水区名谷町の明王寺に、1478年建立されたもので、1900年に川崎氏の自邸に移され、1938年に現在地に移されたものであります。多宝塔の中には、平安時代の持国天像、増長天像が安置されており、一辺3.6m・総高さ約12mのバランスがとれた塔です。



宮大工のざれごと⑩魔除けの「逆柱」

「完璧な普請はかえって魔を呼ぶ」とか「完成したものは滅び崩れ去るのみ」と宮大工のなかで、語り伝えられています。そのため宮大工は、ちょっとした工夫をして魔除けにしています。日光の陽明門での一例を紹介しましょう。陽明門の12本の柱は、「グリ紋」と呼ばれる渦巻き文様が彫られています。内側の右から二本目の柱だけが他の柱と逆に下向きになっていて、「魔除けの逆柱」と呼ばれています。一本の柱だけ、逆にして完璧さを崩して不滅の建物を造ろうとしたものです。もう一つの例として、知恩院の御影堂の屋根の上にちょこんと2枚の瓦が使われずに載って未完成の状態を示しています。これも魔除けの手法です。

第 81 番 斑鳩寺三重塔—天台宗—

兵庫県揖保郡太子町

推古天皇に聖徳太子が法華経を講じた賞として土地を与えられ、法隆寺に施入したことにより、法隆寺鶺鴒荘として発展し、その地が太子町と名づけられ、大和の仏教文化が移植され、斑鳩寺が建てられ、三重塔まで建立されたと知り、早速訪れました。斑鳩寺は、姫路駅から竜野行きバスに乗り、鶺鴒で下車し、10分ほど歩くと、門前に着きます。山門を抜けると、正面が講堂で、左手に太子堂、右手に三重塔があります。

現在の三重塔は、領主・赤松氏の願で永禄八年（1565）に再建されたもので、平安時代の和様塔婆の復古調を再現していますが、和様でありながら四隅の尾垂木上に天竺様の持送りを乗せているのが珍しい。一辺 4.6m・総高さ 24.8m の相輪が長くて立派な塔であります。



第 82 番 泉生山酒見寺多宝塔—高野山真言宗—

兵庫県加西市北条町北条

驚くばかりの極彩色の多宝塔が、加西市北条町にあると聞き、どんな姿か期待に胸を膨らませて訪れました。酒見寺は、加古川駅で乗車し、栗生駅で北条鉄道に乗り換え、終点北条駅で下車し、15分ほど歩くと山門に着きます。山門をくぐると、参道の両側に灯籠が並び、正面に本堂、左手前に極彩色の多宝塔があります。

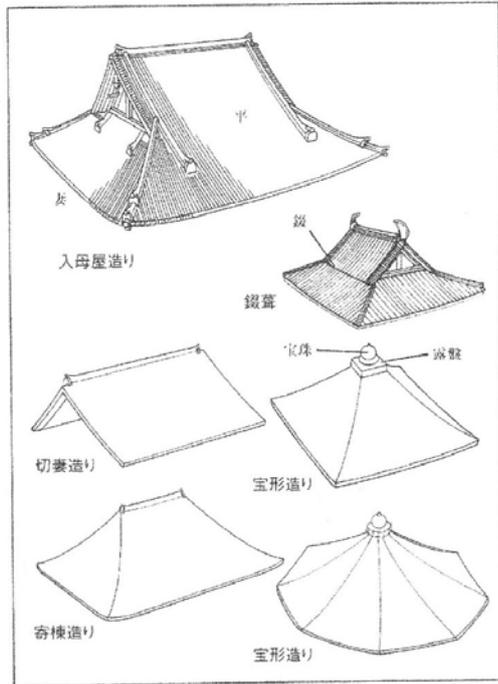
本寺は、天平十七年（745）酒見明神の神託を受けた行基が、聖武天皇に奏上し、寺号を酒見寺として開創したと伝わる。すなわち、播磨三宮・酒見社の神宮寺として建てられました。酒見社の神主職は、創立にかかわった山酒人の子孫の山氏が受け継いできましたが、南北朝時代に断絶し、以降は本寺の僧侶が同社を管理してきました。平安時代から勅使の参詣が行われていたが、二度全山を焼失している。江戸時代に入り、姫路城主となった池田輝政が城の守護寺に定め援助し、寛永年間に幕府の命を受けた実相院隆恵が再興した。さらに将軍徳川家光が朱印寺と定め、代々将軍から朱印状を下附されて隆盛した。本寺と同社のある地は、丹波・但馬方面への街道沿いでもあるため宿場町としても機能してきました。

多宝塔は、内法長押の波模様、台輪の牡丹唐草模様、カラフルに塗り分けられた斗拱、丸桁の雲、柱頭の金欄卷、隅木の描金具などなど、ふんだんに施された極彩色の装飾が眼を引きます。さらに、下層の屋根は、本瓦葺きで、上層は、檜皮葺きであることも、珍しい点です。建立は、1622年、一辺4.9m・総高さ15.4mの非常に華やかな塔であります。



宮大工の知識—X屋根と妻飾り

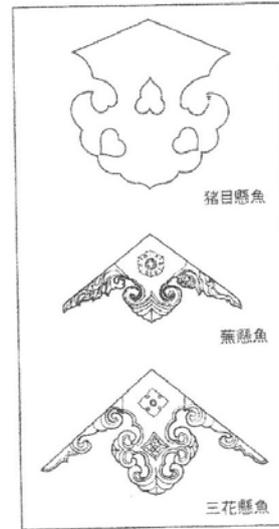
屋根形式



▲屋根の形式

妻飾り 懸魚

・破風下の横材の木口を風雨から護る
役目をもつ装飾用の板材



屋根葺材

- | | |
|----|-----------------------|
| 瓦 | 本瓦/棧瓦 |
| 柿 | 薄い樅や杉の板を竹釘で止める(こけら) |
| 栩 | 厚さ1cm以上の板を柿葺き状に葺く(とち) |
| 檜皮 | 檜の皮を屋根に打ちつけたもの(ひわだ) |
| 板 | 厚板・流板・目板 |
| 茅 | |
| 銅板 | |